The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 日本近代朝鮮語教育史から見た本田存と朝鮮語 |
| Author(s) | 植田, 晃次 |
| Citation | 人文学林. 2024, 1, p. 1-22 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/95130 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 日本近代朝鮮語教育史から見た本田存と朝鮮語

植　田　晃　次

# 일본 근대 한국어 교육사의 시점에서 본 혼다 아리야（本田存）와 한국어

우에다 고오지

논문초록：혼다 아리야（本田存，1871-1949）는 도쿄외국어학교 교수로서 한국어 교육에 종사한 인물이다. 하지만 그는 수영과 유도의 지도자로서 더욱 알려지고 있다. 본 논문에서는 인물사주의（人物史主義）에 입각하여 수영，유도，한국어라는 세 가지 요소를 통합하여 그의 인물상을 밝힘으로써 일본 근대 한국어 교육사의 시점에서 혼다와 한국어의 관계를 고찰하였다.

キーワード：本田存，水府流太田派，講道館

## 1. はじめに

近年開発された「人物史主義」・「原物主義」という方法論[1)]と「旧朝鮮語学」という概念[2)]に基づき，明治維新以降に朝鮮語と関わった日本人，とくに朝鮮語学習書を著した人物について，その経歴と残した朝鮮語学習書を手掛かりに日本近代朝鮮語教育史の視点から解明した一連の成果が公開されている[3)]。

本論文で取り上げる本田存（ほんだ　ありや，1871～1949）[4)]は，東京外国語学校で約20年間を助教授・教授として勤めた経歴から朝鮮語教育史でその名が知られている。他方，本田の人物史の別の側面を見れば，学業の傍ら水府流太田派に弟子入りするとともに講道館に入門し，

1）この方法論の定義は植田（2012: 204）参照。

2）矢野（2012）が提唱した，わずかな専門家が担い朝鮮語の性質を究明しようとする「朝鮮語研究」とは明確に区別される「朝鮮語の運用を目的とする朝鮮語学」を指す概念。

3）植田（2009）から植田（2023）に至る一連の研究や矢野（2009, 2012, 2014）など。引用文献に挙げた以外にも伊藤伊吉・弓場重栄・笹山章・伊藤韓堂（卯三郎）などに関する植田の論考がある。

4）肖像写真は東京外国語学校（1916?: [3]），――（1916: 口絵），遊泳中の写真は高橋（1919: 口絵）の「遊泳術の三体」の一図，柔道で背負い投げをかける写真は工藤（1941: 8-11）などに見られる。また，直筆は本田（1934: 4）などに見られる。名の読みは浦辺（1952: 28），村上（1984: 195）によった。

水泳と柔道の世界でより活発な活動を繰り広げていることから，水泳・柔道の指導者としてより広く知られている。

先行研究や関連文献としては，水泳・柔道・朝鮮語の3つの分野での言及がある。水泳では長谷川（1990）が詳しい[5]。また，茗水百年史編纂委員会（2002）所収の文章で多く触れられており，なかでも梅田（2002），米重（2002），真田・中島（2002）には比較的まとまった記述がある。ただし，史資料以外に人間の記憶に基づく部分もある回顧録の特性に注意を要するものもある。

柔道では山岸（1977, 1979）などのほか，永岡（1949）と子安（1949）による本田の追悼文がある。また，『国士』（『柔道』・『有効乃活動』・『柔道界』・『大勢』・『作興』）などの柔道関係の雑誌や上村（2012）にも断片的ではあるが本田に関連する記載がある。

朝鮮語では折口（1930; 1930[2]），服部（1935, 1964, 1968），石川（1997, 2014），東京外国語大学史編纂委員会（1999），植田他（2006, 2007），野中（2008），柿木（2013），慶谷（2009）などで断片的，あるいは簡略に言及されている。

また，村上（1984）は3つの分野に言及した回顧録である[6]。なお，公刊資料ではないが，3つの分野を統合して論じたものとして植田（2015, 2016a）がある。さらに，東京外国語学校と講道館での本田に言及した発表要旨として東・飯島（2016），嘉納治五郎との関係について時系列を軸に分析・考察した論文として東（2017），嘉納と本田を水術の面から述べた真田・椿本・高木（2007）がある。このほか，学校体育という面から本田の活動について述べた浦辺（1952）がある。

ここで本田に対する従来の言及例を2つ挙げる。まず，館山・金台寺にある本田の墓碑に刻された文言を本論文の筆者による判読に基づき示す[7]。

**（正面）**本田存先生之墓　**（向かって右側面）**先生は上□[8]館林に生れ水泳は水府流太田派を/極め柔道は講道館八段にして明治三十六年よ/り北條の地に三十余年間斯道の指導に当られ/実に房州水泳並柔道の開祖である　**（向かって左側面）**昭和二十四年一月二十一日/客死於北條海岸仮寓分骨埋葬/行年七十九歳　**（背面）**安房水泳倶楽部/安房柔道有段者会/茗溪会館山支部

5）本書は『日本游泳術』（高橋雄次郎，造士会，1900），『増補改訂大日本游泳術』（高橋雄治，水交会，1919）から序などを転用しているが，本文は長谷川によるものと見られる。長谷川自ら「おわりに」で「本史を編さんするのについては、入手できるかぎりの資料を集収しました。著書、報告書、会報、雑誌、書簡などを仔細に調べて、真実を探求しました。期日に追われ、短期間に作られたので、誤がないとはいえません。」と述べたように，2次・3次資料的性格を持つことや，典拠が明示されていないと見られる箇所が散見されることに注意を要する。たとえば，「大日本体育会」に関する記述（46頁）など何らかの錯誤と思われる部分がある。

6）朝鮮史研究者となる村上四男は，東京高等師範学校時代に北条で本田から水泳の指導を受けているが，当時「夜など相当に手持無沙汰であったように思われた」本田から朝鮮語を学んでおかなかったことを後に悔いている（村上1984: 196）。

7）墓所は同寺と西光寺（東京・墨田区）にあることが知られている（長谷川1990: 51–53, 55）。本論文の筆者は2015年9月8日に金台寺，11月5日に西光寺で現地調査を行った際，それぞれ墓前で手を合わせた。金台寺の墓所は下掲の墓碑にある通り分骨されたものである。館山市立博物館ウェブサイトの「たてやまフィールドミュージアム」で墓碑の写真が見られる。http://history.hanaumikaidou.com/archives/3874（2023年9月28日最終接続）

8）尾城（2004: 238）は州と読んでいる。なお，尾城の示した墓碑の記述には誤記が散見される。

水泳・柔道関係者によるものであるためか，墓碑からは本田が朝鮮に関わった形跡すら読み取れない。なお，1978（昭和53）年には筑波大学水泳部が館山で慰霊祭を行っている[9)]。

次に，朝鮮語教育史の文脈で語られた本田についての記述を見れば，以下のように朝鮮語との関わりを中心としつつ水泳・柔道については簡単に言及しているにとどまる。

「本田存（ほんだありや、一八七一～一九四九）は再興された外国語学校の第一期生で、一九〇〇年卒業と同時に母校の教官となった。一九〇三年七月から翌四年三月まで、文部省留学生として韓国に留学。講道館柔道師範であり、水府流水泳師範でもあった。講道館の出版物にみられるほか、村上四男『韓史余滴』にも本田の思い出が収められている。」[10)]

このように，従来の言及では，多くの場合，水泳・柔道の指導者としての本田，あるいは朝鮮語教師としての本田のいずれかについて断片的に着目し，かつ他の側面については触れられないか少し言及されるに過ぎず，これらを統合して論じようとしたものは管見の限りない。

本論文では，朝鮮・朝鮮語と関わらない時期を含めたその人物の生涯を通して，時代の中にその人物や著作を位置付けて考察する人物史主義に基づき，水府流太田派師範・本田存，柔道8段の講道館元老・本田存，東京外国語学校教授・本田存の人物史を嘉納治五郎という補助線を引くことによって統合し，本田存という人物の全体像を可能な限り明らかにする。そして，それによって日本近代朝鮮語教育史の視点から本田と朝鮮語との関わりについて考察しようとするものである。本論文はまた，これまで朝鮮語教育史で扱われた多くの人物とは異なり，朝鮮語学習書を**残さなかった**人物の分析を試みるものでもある。5.で後述する通り，朝鮮語との関わり方を見れば，本田はこれまでに日本近代朝鮮語教育史で考察された旧朝鮮語学の人物という範疇に当てはまらない，全く異なるタイプの人物と見なすことができる。

本論に先立ち，ここで主として本田（1934），工藤（1941），長谷川（1990），真田・中島（2002）に基づき，本田の誕生から水泳・柔道，そして朝鮮語との出会いまでをたどっておく[11)]。

本田存は1871（明治4）年3月16日，群馬県館林[12)]秋元礼朝藩士・本田九八郎の二男として生まれたとされる[13)]。館林には渡良瀬川・利根川が流れ，少年時代から水泳に親しむ。尋常小学校を終え上京し，麹町下六番町に住み，攻玉社中学校（俗称近藤塾）に学ぶ。17歳の頃，海軍に志し，昼間は働き，夜は神田の英語学校に通っていた。

同郷の友人・大坪克和（旧姓田村）の紹介で，1888（明治21）年6月1日[14)]，講道館柔道に入

9）茗水百年史編纂委員会（2002: 272）

10）石川（1997: 111-112）

11）その他の資料によった箇所は注記する。

12）――（1899a, 1909b）他では「東京府士族」・「東京」とされているが，後述のように幼少の頃，上京したことによるのかもしれない。この上京は祖父が江戸・深川下屋敷に居住していた（山岸1977: 25）ことによるのではないかと思われる。

13）長谷川（1990: 36）。誕生日については，典拠なく記載されている資料もあるが，ここでは工藤（1941: 8）にもよった。これは東京外国語学校辞職時の「辞表」に添付された「診断書」（国立公文書館デジタルアーカイブ「内務大臣秘書官加藤久米四郎他十八名官等陞叙並任免ノ件」請求記号：任B00856100）の生年月日とも一致する。

14）子安（1949: 26）。入門の日付は――（1899a: 27）による。なお，本田（1939: 12）では，入門前から嘉納を知ってい

門する。入門当時は三崎町に居住していた。一方，幼少の頃から水泳に親しんでいた本田は，上京後，隅田川の水練場で水府流太田派に出会い太田捨藏に弟子入りする。26歳での高等商業学校附属外国語学校への入学という朝鮮語との出会いまではあと約10年を要する。

## 2. 本田存と水泳

水泳では水府流太田派の第4代師範となる。3.で見るように，嘉納治五郎の直弟子となった本田は，講道館で柔道の指導者として活動し元老となる。嘉納は柔道のほか水泳にも大きな関心を持ち，その発展を支えた。嘉納が設けた造士会や校長を務めた東京高等師範学校などを中心に水泳が発展したのも，嘉納の水泳に対する「考えを実際に進めてくれた人物が、講道館柔道の門弟、本田存」[15]であったといわれるように，水泳に関心を持つ嘉納とその心得のある本田が結びついたことによるといえよう。『日本游泳術』（造士会，1900/明治33年）の奥付には本田の名が造士会の代表者として記されている。

1897（明治30）年には，造士会の水泳場が松輪に開設されることになり，嘉納の依頼で本田が初代師範となった[16]。東京高等師範学校では水泳が重視され，本田は1897（明治30）年，同校の水泳の講師となり，留学で在韓していた期間と1937（昭和12）年を除き，少なくとも1942（昭和17）年までその任にあった[17]。東京高等師範学校游泳科担任講師の肩書きで本田の名により発行された1941（昭和16）年12月26日付の游泳指導員資格証が存在すること[18]からもこのことが裏付けられる。同校では水泳が1902（明治35）年から必修となり，1年生の夏休みに2週間，北条での遊泳の実習が義務付けられていた[19]。同地には嘉納の命名による芳燭舎という水泳のための寮が設けられていた[20]。このような東京高等師範学校での活動によって，本田はいわゆる「高師流」を生み出し広めた[21]。

造士会の松輪水泳場開設や遠泳での副監督兼游泳教師を務めるほか，桐陰会（東京高等師範学校附属中学校校友会）水泳部の水泳指導を宮田でも行った[22]。また，東京高等師範学校附属中

---

たと述べている。

15）真田・中島（2002: 210）

16）長谷川（1990: 36–37）

17）村上（1984: 194）。『東京高等師範学校第一臨時教員養成所一覧　自大正十三年四月至大正十四年三月』（東京高等師範学校，1925）には，明治30年1月～同36年8月，同37年6月～大正3年7月は嘱託，大正3年7月～「現」は講師として本田の名があり，現在職員の講師の箇所に担当科目は游泳とある（226, 264頁）。また，畠山（1995: 94）には，游泳，水泳指導，水泳の担当教員として本田の名があり，大正4年～昭和11年は講師，昭和13年～16年は嘱託，昭和17年には講師とある。浦辺（1952: 29）では在任を1943（昭和18）年までとしている。

18）茗水百年史編纂委員会（2002: 257）

19）村上（1984: 193）。長谷川（1990）では，1905（明治38）年に嘉納の依頼で附属中学の水泳期間外に東京高等師範学校水泳師範を兼務することになったとある。

20）真田（2002: 4）

21）日本水泳連盟日本泳法委員会（2001: 228）

22）真田・中島（2002: 212），長谷川（1990: 36–37）

学校の富浦水泳場開設でも尽力し，初代師範を務めている[23]。「来房」の時期に齟齬があるが，「東京高等師範学校（筑波大学）の水泳師範として、来房。1903（明治36）年から30余年、北条に住み、開校3年目の安房中学で指導をおこなう。」[24]というように，東京高等師範学校を含む嘉納治五郎関係の場のほか，地元の中学でも長年に渡って北条一帯で水泳の指導に尽くした。このほか，海軍兵学校の水泳講師・嘱託教授（1930/昭和5年頃・1941・1942/昭和16・17年当時）[25]や文部省水泳講習会講師（1919/大正8年頃）[26]も務めた。

この間，内外人競泳大会（1898/明治31年・1899/明治32年）の主催委員となり審判を務めたこと[27]，日本初の十哩遠泳（1905/明治38年，大阪毎日新聞主催）でその大会役員を務めたこと[28]，第一高等学校と連合して第1回関東連合游泳大会（1906/明治39年）を開き水泳師範を務めたこと[29]，極東選手権競技大会（1917/大正6年）で水泳部委員長・競泳委員長を務めたこと[30]など，各種行事の開催・運営にも精力的に取り組んだ。

また，一高水泳部日本泳法研究会顧問（1917/大正6年頃），日本泳法会最高顧問（1924/大正13年）[31]なども務めたほか，日本游泳聯盟や水上競技連盟の行事で日本泳法（式泳）を披露したこともある[32]。さらには，『増補改訂大日本遊泳術』（高橋1919）の増補改訂にも関わった[33]。

その後，桐陰会水泳部（富浦）と高師水泳部（北条）の指導に余生を送っていたが[34]，敗戦後は北海道の弟子たちの間を水泳行脚するも体調衰え，1948（昭和23）年，北条に引退・療養することになったという[35]。

往年の本田の泳ぎは以下のようであったという[36]。

「（略）見事だったのは先生の横泳ぎである。先生の体格は横泳ぎのためにできているのではないかと思われるほど、静かですーっと黄体（ママ）の姿勢をとられると、それだけで身体はぴたりと

23）長谷川（1990: 42, 2005: 184）

24）愛沢・池田（2007: 2008[2刷]: 11）。なお，「北条に住」んでいたのは主に夏期と考えられる。

25）梅田（2002: 69），工藤（1941: 9），米重（2002: 70）。同校での水泳指導については，本田自身が「江田島魂の真価」『朝日新聞』1943年7月18日付朝刊（4）で詳述している。なお，この記事での肩書は海軍兵学校水泳術教授嘱託とされている。なお，執筆者名は明記されていないが，同校の教材類と見られる『水泳参考書』（海軍兵学校，1939年5月）がある。

26）本田（1919: 15）。文部省が行った中等教員水泳講習会（1916年8月1日～）と見られ，本田は主任講師を務めている（「水泳は是から全盛」『朝日新聞』1916年7月22日付朝刊（5））。

27）――（1898: 50, 1899b: 826-827），長谷川（1990: 38），真田・中島（2002: 211）

28）長谷川（1990: 43）。ただし，大会に参加する愛弟子に船で付添うため役員を辞したという。

29）真田（2002: 4）

30）「極東大会水泳委練習」『朝日新聞』1917年4月14日付朝刊（5），「予想通りの出来栄え」『同上』1917年5月13日付朝刊（5）

31）長谷川（1990: 48）

32）長谷川（1990: 49, 59）

33）高橋（1919）の「増補改訂に就て」

34）長谷川（1990: 48）

35）長谷川（1990: 48, 51）

36）引用順に梅田（2002: 68），興津（2002: 52），尾城（2004: 237）

水面に浮いて微動だにせず、太い頑丈な脚でまきこむような一あおりをすると、一挙に七・八メートルは音もなく滑らかに進んだ。」,「われわれは木製の脚立（きゃたつ）を海に運び込み、それを足場に泳法練習を始めた。この台上の初心者に披露してくれる先生の模範技の横泳ぎは天下一品の体形をいささかも崩すことなく、さざ波一つたてず手足のひと掻き、人蹴（ママ）りで優に一〇米を直進。まさに先生お得意の御揮の「体和水」（体、水に和す）」の境地である。」,「先生の身体はまるで「水澄まし」のように、水に浮くのである。いろいろな泳ぎを見せていただいたが、枯れた泳ぎと言うか、陸上を歩いているのと同じように、力の抜けた自然な泳ぎであった。」

水泳の技術指導では，水に親しみ水心を知ることの重要さを説き，「水の抵抗の法則をよく知つて、体水に和し、水と体が一致してこそ本当の泳ぎのうま味が出て来る」と言っていた[37]ということをよく表している。

## 3. 本田存と柔道

柔道では1890（明治23）年3月，初段となったのを皮切りに1944（昭和19）年2月11日には8段まで進む[38]。1893（明治26）年4月には，明治義会（後の独逸協会）で柔道を教え始めている[39]。19世紀後半には，東京高等師範附属中学校で教え始める[40]。1898（明治31）年4月に3段に昇段する頃，柔道指導法の研究会を主催し主幹を務めるなど[41]，柔道の指導と研究に取り組む。晩年にも，年配の高段者が好まない「少年の稽古」を進んで行うほか，1941（昭和16）年度には71歳で寒稽古に皆勤して表彰されるなど[42]，積極的な活動を繰り広げた。

同時に講道館の職員としても働き，「財団法人の評議員として又主に事務方面を担当」[43]した。上村（2012: 111–200）を整理した結果，1901（明治34）年から1946（昭和21）年の間に，道場指導部[44]（講道館有段会研究会主幹，無段者資格審査委員，維持委員，講道館幹事，講道館常務，寄付金募金勧誘係，講道館女子部・幼年部教授，開運坂道場女子部助教），審議部（審議会調査部副主任，同第二部主任，同第三部主事補，同第四部主事補，同監査班副主査），総務部（幹事部幹事），研究企画部（企画課長，秘書課長）などの職務を担当している。

37）浦辺（1952: 29）。後述のように戒名にも「親水」と入っている。

38）工藤（1941: 8），子安（1949: 27）

39）永岡（1949: 26）

40）永岡（1949: 26）。高等師範が御茶ノ水にあった頃とされ，1872～1903年が該当する。

41）工藤（1941: 8–9），山岸（1977: 23），真田・中島（2002: 210）

42）工藤（1941: 9），子安（1949: 27）

43）子安（1949: 27）。「講道館異例の表彰」『朝日新聞』1941年2月6日付夕刊（2）では「講道館評議員、庶務課長で同館の〝雷爺さん〟」と評されている。工藤（1941: 8）からも「雷爺さん」という呼び名があったことがわかる。

44）上村（2012）での分類による。

また，本田による著術物[45]や諸資料では，1917（大正6）年から1944（昭和19）年の間に，講道館の評議員・幹事・幹事長・庶務課長の肩書きが見られる。各役職で最も若い年代を見れば，少なくとも，1909（明治42）年には評議員，1914（大正3）年には幹事，1930（昭和5）年頃には庶務課長といった要職を務めていたようである[46]。

講道館の職務について，嘉納に対する追悼文で本田自身が講道館庶務課長の肩書で次のように述べている[47]。

「私が毎年夏期になると講道館の職務は休んでもっぱら水泳指導の任に当っているのも実は先生の思召によるものである。先生は水泳の普及は最必要と考えておらるるも御自分では水に溺れない程度はなし得るも人を指導するほどの力はない。幸い本田はその勝れた技能を持っているからその力を発揮し普及指導に努めてもらいたい。講道館の用務も大切だがそれには代り得る者もあるから顧慮せずともよろしい、要するに本田を水泳界に活躍せしむるのは、自分が水泳の必要を認め斯界に何か貢献せんとする意にほかならないのであると申されたのであった。」

ここからは，講道館での職務は，ことに夏期においては名目上のものであったことや嘉納が本田に対して大きな信頼を置いていたことがわかる[48]。

これらの職務とともに，柔道の技術論を中心に，旺盛な執筆も行っていた。さらには，1920年代から女子部の開設，講道館女子部主任（1923/大正12年）[49]への就任とともに，「女子柔道」や「女子の護身法」の普及へと活動領域を広げており，その分野の著述物も見られる。1933（昭和8）年12月発行の愛知県犬山高等女学校校友会の『会誌』11号には，本田の指導による「女子護身術」（全５枚含表紙）が収められている[50]。また，1938（昭和13）年頃には，東京女子高等師範学校や東京女子体操音楽学校などで護身術を指導している[51]。

1945（昭和20）年3月14日には，前夜に戦災類焼した講道館本館の消火に敢闘したという[52]。1946（昭和21）年5月4日（嘉納治五郎の命日）には長年の功績により「元老」の称号を受ける[53]。

本田自身が「永年先生の御厚誼を蒙った」と述べ，周囲からも「講道館柔道が漸くその基礎を確立し、躍進に移つた時代に、君は早くも嘉納師範の膝下にあつて斯道のために尽瘁された

45）紙幅の制限により，本論文では本田の著述物一覧と年譜を収録できなかった。

46）上村（2012: 115, 123），梅田（2002: 68）

47）本田（1988: 126）

48）時期によって異なりはあるだろうが，本田がどのような職によって主たる生計の糧を得ていたのかは不明である。

49）上村（2012: 122）

50）愛知県立犬山高等学校ウェブサイト＞百年のあゆみ＞昭和８年，「会誌」のこと http://www.inuyama-h.aichi-c.ed.jp/ayumi/index30.htm（2015年10月21日最終接続，2023年9月27日現在リンク切れ）

51）本田（1938: 176）。女子高等師範では1915（大正4）年当時週2回有志に，1918（大正7）年当時柔道の女性教師養成を目的に設けられた如蘭会で教師・生徒に教授していた（「女の柔道」『読売新聞』1915年6月1日付朝刊（4），「婦人の柔道に攻撃の手は教へず」『同上』1918年1月16日付朝刊（4））。

52）子安（1949: 27）

53）子安（1949: 27）

のである。」[54]と見られていたように嘉納治五郎の直弟子である。嘉納の死去（1938/昭和13年5月4日）にあたって見せた，「館員に涙と共にあたかも慈父を失つた頑是なき可憐の小児の様子おろおろと悲報を伝達された。」[55]という姿も本田と嘉納との関係を物語る。

管見の限りで，柔道を通して本田と朝鮮との関わりが見えるのは，1918（大正7）年10月6日の講道館朝鮮支部開設式に参加する嘉納治五郎に随行したこと程度である[56]。

## 4. 本田存と朝鮮語

本田と朝鮮語の関わりが見え始めるのは，1897（明治30）年9月，26歳で高等商業学校附属外国語学校韓語科正科に第1期生として入学した時からである[57]。在学中の教員には，教授の山崎英夫のほか，外国教師として，年度によって異なるが，呉世昌・柳苾根・尹致昨・趙慶恊がおり[58]，これらの教員から朝鮮語を学んだと見られる。必ずしも刊本を用いて習ったとはいえないが，本田がどのようなものを用い，どのように学んだかを示す確かな資料は見出せていない[59]。ところで，高等商業学校の後身である一橋大学と後身の東京外国語大学には，『韓語入門』，『交隣須知』（1881），『林慶業伝』，『訂正隣語大方』などが所蔵されている。これらには高等商業学校や東京外国語学校の蔵書印・登録票の押印・貼付，前者から後者への「保管転換受」を示す押印，標題紙に貼られた（おそらく）通し番号票に「生徒用」と押印[60]があることなどから教科書として用いられたものと見られる。東京外国語大学の『韓語入門』（全2巻）は完本18組36冊，『交隣須知』（1881）（全4巻）は完本23組92冊，『林慶業伝』（全1巻）は25冊，『訂正隣語大方』（全3巻）は完本26組78冊が残されている[61]。このことから，本田は釜山の語学所

54）本田（1988: 125），永岡（1949: 26）

55）子安（1949: 27）。原文では，「おろおろ」の後半の「おろ」は繰り返し記号で表記。

56）――（1919: 68）。韓永大（2008: 218）によれば，嘉納と朝鮮の関係については，1921年頃から一層明確にした「自他共栄」の思想を「日本国内の雑誌、講演、談話を通して表明し、さらには台湾、琉球、朝鮮や旧満州にも出かけて説いていた」という。東・飯島（2015）による限り，嘉納は漢文を含む複数言語に通じていたものの朝鮮語を学んだ形跡は見られない。また，「言語は海外に行く以上はその行った国の言語を覚え、その国の言語を使わなければならぬ。」という類の言説はあることを紹介した上で，「嘉納の外国語学習や国際感覚の規範は欧米を中心としたものであり、アジアを対象・規範とした記述は見られない。」と指摘している（東・飯島2015: 19）。なお，本田は1940（昭和15）年夏に満洲に行ったようであり（工藤1941: 8），その途上で朝鮮を通過している可能性がある。

57）野中（2008: 249–250, 534）。『高等商業学校一覧 従明治三十年至明治三十一年』（高等商業学校，1897）Dでは朝鮮語本科生ではなく朝鮮語特別科生に，『同　従明治三十一年至明治三十二年』（同，1898）Dでは韓語正科第二年級に挙名されている。

58）東京外国語大学史編纂委員会（1999: 976）

59）本論文の執筆者の調査と植田他（2007: 127–128，執筆は山田寛人）によれば，本田の入学以前に刊行された主な学習書類は以下の通りである。『韓語入門』（宝迫繁勝，1880印行），『日韓善隣通語』（宝迫繁勝，1880印行），『交隣須知』（浦瀬裕 校正増補，1881印行），『林慶業伝』（外務省蔵版，1881印行），『訂正隣語大方』（浦瀬裕 校正増補，1882印行），『和韓会話独学』（武田甚太郎，1882），『交隣須知』（宝迫繁勝 刪正，1883印行），『再刊交隣須知』（浦瀬裕 校正増補，1883印行），『日韓英三国対話』（赤峰瀬一郎，1892），『日韓通話』（国分国夫，1893），『新撰朝鮮会話』（洪奭鉉，1894），『朝鮮語学独案内』（松岡馨，1894），『日韓会話』（［参謀本部］，1894），『実地応用朝鮮語独学書』（弓場重栄・内藤健，1896）

60）「生徒用」の押印は例えば東京外国語大学蔵の『韓語入門』K/II/192（上下とも）にある。

61）伊藤（2000）でも『交隣須知』（1881）について，「「生徒用」の付箋」，各冊の訂正や書込から「この本が実際のテキストとして使用されたものと考えられる」と判断している。

の流れを汲むこれらの教科書を基礎として朝鮮語を学んだ可能性がある。

1900（明治33）年，卒業と同時に母校の後身である東京外国語学校に助教授として奉職し，1904（明治37）年4月5日付で教授となり，この間20年近く，そのほとんどの期間（1902/明治35～1916/大正5年）は金沢庄三郎とともに在職した[62]。金沢は1917（大正6）年に依願免官・辞職するが，本田はその後も職にあって1918（大正7）年9月30日，47歳で退官する[63]。

東京外国語学校在職中の1903（明治36）年7月から翌年3月まで，本田は文部省派遣留学生として韓国に留学している[64]。在韓中の詳細については不明であるが，「日露戦争の始まった明治三十七年二月初、韓国の仁川港沖で日本の瓜生艦隊がロシアのコレーツ、ワリヤークの二艦を撃沈した時の模様を先生からうかがったことがある。」と村上（1984: 196）は述べている。また，「日露戦争前、朝鮮に行つた時」に姿三四郎のモデルとされる西郷四郎に会った[65]というのも留学中の出来事と思われる。

在職中の同僚には，期間の長短や職名の変遷はあるが，金沢庄三郎の他に山崎英夫・岡倉由三郎・山本恒太郎・柳苾根・尹致旿・趙慶協・延浚・徐基殷がいた[66]。前述のように，ことに金沢とは長きに渡って同僚として勤めたことになる。

金沢の辞職後，朝鮮語学科最後の卒業生（本科）4名を1918（大正7）年3月に送り出し，前述のように1918（大正7）年に退官するものの，1921（大正10）～1923（大正12）年まで，講師として朝鮮語を教える。これは速成科の学生（1922/大正11年に2名，1923/大正12年に1名が卒業）のための任用であったという[67]。1918（大正7）年8月30日付の「脳神経衰弱症」との診断書が添えられた辞表には「近来神経衰弱症相募リ職務ニ不堪候」と理由が述べられているが[68]，実際に病魔に侵されていたというよりは，当時の常套的な表現と見なして差し支えないであろう。

本田と朝鮮語の関わりを示すエピソードは，以下のような水泳の昇級試験の採点を朝鮮文字で書いていたということと授業の断片的な様子[69]，「諺文投票」の容認に備えた選挙管理関係者

62）東京外国語大学史編纂委員会（1999: 976），「叙任辞令」『朝日新聞』1904年4月6日付朝刊（2）。「海軍主計大監岡本堤太郎外四名特旨叙位ノ件」（アジア歴史資料センターDB: A11112666400）には「明治三十七年四月五日任官/大正七年九月三十日退官」とあり，助教授採用については記載されていない。

63）前掲アジア歴史資料センターDB: A11112666400

64）東京外国語大学史編纂委員会（1999: 975-977），植田他（2006: 3-4, 37，執筆は石川遼子）。1904（明治37）年3月16日に帰国している（『官報』6218，1904年3月28日，569頁）。留学期間は「外国留学生差遣」『朝日新聞』1903年7月28日付朝刊（3）では「満七ヶ月間韓国へ留学を命ぜられたり」，植田他（2006: 4，執筆は石川遼子）では「半年」とされ齟齬がある。浦辺（1952: 28）は「日露戦争が勃発した為帰朝の已むなきに至り」と述べ，開戦により留学が中断されたことを示唆している。

65）丸山（1950: 236）

66）東京外国語大学史編纂委員会（1999: 976）

67）石川（1992: 59-60）

68）「内務大臣秘書官加藤久米四郎他十八名官等陞叙並任免ノ件」（国立公文書館デジタルアーカイブ，請求記号：任B00856100）

69）引用順に村上（1984: 195），梅田（2002: 68）。浦辺（1952: 28）にも梅田と同様の記述がある。

への「諺文」講習の講師を務めたこと[70]程度しか見当たらない。

「本田先生は昇級試験の採点をされる時には、必ず人が見ても分らぬ符号を採点簿に付けていると、これを手伝った上級生から聴かされていた。しかし後年に私も先生の傍に近付けるようになって、はじめて、このなぞが解けた。それは先生がハングルでサインしていたからである。」,「先生は東京外国語学校で朝鮮語を専攻された。館山の水泳の進級試験のさい、採点簿を除(マ)いて(マ)みても、なんだか符号のようなものが書いてあって全然点数がわからなかった。どうも朝鮮の数字であったとのことである。」

本田の朝鮮語については,「曽ての名通訳でいらっしゃったと伺ったが朝鮮語の学問的研究家ではなかった」[71],「会話・通訳が堪能であったという」[72]といわれている。

朝鮮語教師であり研究者ではない本田が朝鮮語という言語の構造を言語学的にどのように分析して捉えていたのかを示す彼が執筆した学習書・教科書，資料は発見できていない。また，後述する東京帝国大学での様子を言語学者の服部四郎は「入門的な講義の後に，小学読本を一年生から始めて六年生のまで6冊あげた。その後は新聞の切り抜きなどを読んで下さった。」[73],「先生は名通訳だとのことだったが、文法的な説明は何一つされず、ただゆっくりと流暢に朗読しては後について読ませ、訳をつけてから次に進むという具合だった。」[74]と述べている。本田の授業ぶりについても,「本田先生の授業は毎週几帳面にあつた。試験もあつた。試験のすんだ後まで授業が一回あつた。だから「大学にはひつてから最も熱心に学び始めた最初の非母国語は朝鮮語であつた」と云ふことになつて了つた。私は朝鮮語の試験成績票に「終了」と押したのを今も保存してゐる。」[75]と述べている。また,「もう四十年も昔の、大学一年生のころのことである。朝鮮語の小学一年生の読本を勉強していると、法科の友人が吹き出して了った。奇想天外だという。」[76]という述懐とも併せて見れば，普通学校の朝鮮語読本などを用い，如上のような形式で朝鮮語を教えていたことがわかる。東京外国語学校での授業の様子もこのようなものであったのではないかと推測される。手軽な会話書などではない手堅い教材の選択や授業ぶりから，当時の朝鮮語教育の環境の中で本田なりに朝鮮語を体系的に教えようとした跡が看取

70)「諺文使用講習」『朝鮮新聞』1930年2月26日付朝刊（2),「選挙管理者等の朝鮮語講習会」『毎日申報』1930年2月17日付夕刊（1)（後者は原文朝鮮語）

71）服部（1984b: 65)。どのような場で「名通訳」として活動したのかは不明である。服部（1988: 11）でも「私は豪快なこの先生が大好きではあったが，そして先生は曽つての名通訳だったという事ではあったが，本当のことを言うと，朝鮮語は朝鮮の方から習いたいと，当時から強く希望していたのであった。」と「名通訳」と述べている。また，柿木（2013: 53, 132）でも本田を「通訳」としているが，管見の限りでは,「通訳」として活動したという具体的な形跡は見いだせない。なお，東邦協会員として同会附属専門学校朝鮮語科生徒とともに,「伊藤公遭難謝罪」のため来日した「謝罪使」の面倒を見ている（「藤公墓前の謝罪使」『朝日新聞』1910年1月8日付朝刊（2))。一例として，このような機会に通訳を務めた可能性はある。

72）植田他（2007: 8，執筆は石川遼子）

73）服部（1988: 11）

74）服部（1968: 228）

75）服部（1935: 424）

76）服部（1968: 28）

され，立派な朝鮮語教師だったことがわかる。

なお，在職中には，校内の韓語会の会長を務めており，その活動については東京外国語学校で朝鮮語を学び，朝鮮総督府通訳官となる西村真太郎が次のように報告している。

「校内の韓語会は追々達発致居り候今年四月某日本田会長、柳先生、延先生、山本先生及び卒業生松脇氏の御出席にて一同松本楼に会し得る所楽む所多く共に歓を尽して散会し其れより直ちに松脇氏の案内にて折柄韓国観光団として度来せる諸氏を訪問し此の異郷の客を各自修得せる韓語を以て聊か慰め申候覚束なき韓語今初めて役に立ちしと言ひ合ひつゝ腋下に流るゝ冷汗を夕日に照り添ふ春風に納めつゝ袂を別ち申候」[77)]

この会の活動の詳細は不明だが，『学の友』という雑誌を少なくとも2号まで発行したことが確認される[78)]。東京外国語学校では，この他に柔道部の初代部長なども務めている[79)]。

東京外国語学校を辞した後，前述のように本田は東京帝国大学で講師として朝鮮語を教える。東京帝大では，1902（明治35）年から1916（大正5）年まで金沢庄三郎が，1923（大正12）年から1928（昭和3）年まで本田が講師として朝鮮語を担当した[80)]。村上四男は末松保和・日野開三郎が本田の授業を聴講したことを両者から「天理の旅宿」で直接聞いたと述べている[81)]。このほか，前述の服部四郎とともに，有坂秀世も東京帝大で本田の授業を受けていた[82)]。慶谷壽信は有坂について，1928（昭和3）年度の本田の授業「朝鮮語（前期）」の単位が認定されていることを明らかにしている[83)]。金沢の授業がなくなった後，本田の授業が1923（大正12）年度から1930（昭和5）年度まで開講されていたものと見られる[84)]。

ところで，本田の東京帝大での授業担当には，以下のような経緯があったことがわかってい

77）西村（1909: 18）

78）――（1909a: 81）

79）片桐（1937: 97），山岸（1977: 口絵, 23）。山岸（1979: 9）では本田の令息から寄贈された本田の旧蔵書『大日本柔道史』を炬友会柔道部史出版委員会事務局に保管していると述べている。また，『校友会雑誌』（東京外国語学校々友会，1908年12月30日発行: 29, 35, 37, 39, 104頁，1910年12月20日発行：85, 93–94, 96, 98, 118頁，1912年3月31日発行：166, 189, 208頁）などに柔道部・水泳部・校友会関係での本田の活動が挙げられている。

80）東京帝国大学（1942: 456, 458–459）。『東京帝国大学一覧』Dの1901（明治34）年～1933（昭和8）年度分も確認した結果，少なくとも1902（明治35）年度から1915（大正4）年度まで金沢庄三郎の名が「朝鮮語」または「朝鮮語学、アイヌ語学」の講師として見られる。その後，1923（大正12）年度から本田存の名が「朝鮮語学」または「朝鮮語」の講師として見られる。また，少なくとも1901（明治34）年度・1916（大正5）年度～1920（大正9）年度・1931（昭和6）年度にはこれらの科目は挙げられていない。ただし，1905（明治38）・1921（大正10）・1922（大正11）・1924（大正13）・1925（大正14）・1927（昭和2）・1928（昭和3）・1929（昭和4）・1931（昭和6）・1932（昭和7）年度分は閲覧し得ていない。そのため，本田の授業の廃止年度は確定できていない。開設については，服部（1984b: 65）にも「大正12年度から本田存先生の「朝鮮語」が始まる。」とあることと合わせ，同年と見て差し支えないであろう。1923（大正12）年度の『一覧』の記載については服部（1984a: 26–34）でも指摘されている。また，『会員名簿』東京外語同窓会（東京外国語学校同窓会）には，本田について少なくとも1931（昭和6）年12月以降1940（昭和15）年12月まで「東京帝国大学文学部講師、講道館幹事」の職業名が記載されているが（1933–1936・1939年は未確認），名簿が更新されていなかった可能性が高い。

81）村上（1984: 193）。ここでは本田の授業が1922（大正11）年から1930（昭和5）年頃まで続いたと推測しており，期間に齟齬がある。また，服部（1984b: 65）は，「金澤博士の朝鮮語に関する講義が大正6年からなくな」ったと述べている。

82）服部（1964: 211, 1968: 228），慶谷（2009: 157）

83）慶谷（2009: 157, 166）。「前期」は現在の「初級」に当たるものと推測している。

84）前述のように，1922（大正11）年度と1931（昭和6）年度の『一覧』を確認し得ていない。

る。和田・岩生（1981: 22）は次のように回顧している[85]。

「和田　それから今年の学年の講義はどうしましょうという民主的な行き方と、今一つわれわれが講師を雇ったことがある。朝鮮語。
岩生　そう、そう。
和田　学生で小遣いを出し合って、東京外国語学校の朝鮮語の先生を。
岩生　本田存さんと言って、水泳の達人であった方を雇って朝鮮語をやっていただいた。その次から学生が雇うならばというので、あの方は文学部の正式の講師になった。
和田　あれは三上先生が心配して、学生に講義料を持たせるのはかわいそうだから、学校で負担しようということになったのですね。
尾藤　池内先生は朝鮮語の教育はなさらないのですか。
岩生　池内先生もわれわれ学生と一緒に机を並べて習ったほうです。（笑）
和田　池内先生は、朝鮮語に関するかぎり一学生。」

さらに，「東京帝国大学文科大学の教員の中で，学位を持たない唯一の本田の存在は異様」でありながらも講師として任用されたのには，金沢の「「日鮮同祖論」にも異を唱えていた」藤岡勝二（言語学）の「日本語と朝鮮語との親族関係は未証明なのにそれに関して独断的な意見を学生に押し付けられるのは困る、とのお考えに基づくもの」といわれている[86]。

私的な「授業」として学生が開講しようとしたものが，大学に伝わり（おそらく何らかの検討・承認の後）正式のものとなったこと，人選に当たっては藤岡勝二の意向が反映されていたらしいことがわかる。ここには金沢と本田の朝鮮語に対するスタンスの違いも示唆されている。また，この人事が承認されたということについては，藤岡の意図とは別に，当時の東京帝大での朝鮮語自体に対する低い位置づけが反映されている可能性もある。

この他，開始時期は不明であるが，本田は国学院でも朝鮮語を教え[87]，少なくとも1909（明治42）年度に外国語の「韓語」を担当している[88]。岩橋小弥太（1904/明治37年入学）は，外国語に朝鮮語があったので希望したが，希望者が1人だったために4・5名に達するまで開講されず，その間は支那語を受講したことを述べている。ようやく開講した朝鮮語の「先生は金沢先生と本田存先生で、金沢先生には朝鮮語の他に言語学の講義も聴いた。」という述懐を残している[89]。しかし，学則の変更により外国語（英語・清語・韓語）のうち清語・韓語が廃止されることとなり，1910（明治43）年3月30日，本田を含む3人の講師は「学科改廃のため退任」し

85）この回顧録は，村上（1984）でも紹介されている。尾藤は聞き手の尾藤正英東京大学教授。
86）服部（1984b: 65），柿木（2013: 53, 132）
87）工藤（1941: 9），本田（1949: 3），石川（2014: 111）
88）国学院大学校史資料課 編（1994: 407–409）
89）岩橋（1963: 5）。石川（2014: 111, 379）では文献名・掲載誌名を誤っている。

た[90]。国学院で本田の授業を受けた学生には折口信夫もおり，「私は、国学院在学中、四年間、朝鮮語を習ひとほした。手ほどきから見て貰うた本田存先生の後は、金沢庄三郎先生の特別な心いれを頂いた。朝鮮語に就いては、相当の自信もあつた。」と回顧している[91]。

この他，本田は女子清韓語講習所（1905～1907），東洋協会専門学校東京本校（1907～1920年）[92]でも朝鮮語を教えた経験を持つがこれらの授業内容や教材の詳細もまた不明である。

これまで見たように，本田は東京外国語学校を始めとする教育機関で多くの学生に朝鮮語を教えた。東京帝大や国学院では，後に言語学・民俗学・歴史学などの研究者となる服部四郎・有坂秀世・折口信夫・末松保和・日野開三郎・池内宏・岩橋小弥太・和田軍一・岩生成一といった錚々たる人々に朝鮮語の手ほどきをした。また，東京外国語学校在職中の学生には，前述の西村真太郎（1909年卒）のほか，田中徳太郎（1910年卒）・奥山仙三（1911年卒）・山本正誠（まさのぶ）（1914年卒）を始めとし，朝鮮で通訳官・官吏・教員などとして活動した人々もいた[93]。研究者から実務家に渡るこれらの教え子を見れば，朝鮮語の分野において本田が残した足跡の大きさがわかる。

## 5. 本田存にとっての朝鮮語

明治の始まりとほぼ同時の1871（明治4）年に生まれ，80年近い人生を水泳・柔道・朝鮮語の3つの分野を軸として送った本田は1949（昭和24）年1月21日に館山市北条の東京高師水泳部宿舎で脳溢血により亡くなる[94]。

以上で見たように，本田存は水泳・柔道・朝鮮語の3つの分野で幅広く活動し[95]，水泳・柔道では著述物も多く残している。大日本体育協会が「発展的解消」によって大日本体育会に改組された際，同体育協会から体協特別功労者の一人として表彰されていること[96]は本田が水泳・柔道の教育・普及・発展で大きな成果を残したことを示している[97]。

一方，朝鮮語については，先に見た服部の述懐や本田を語る多くの文章で指摘される謹厳さ[98]や水泳・柔道の指導の理論化・体系化を図る著述物に表れた本田の性格にも見られるように，

90）国学院大学校史資料課 編（1994: 403–410）

91）折口（1930; 1930[2]: 16）

92）植田他（2007: 11, 23，執筆は山田寛人），山田（2004: 35–37）

93）植田他（2006: 25–28，執筆は山田寛人）

94）（訃報）「本田存氏」『読売新聞』1949年1月22日朝刊（3），（訃報）「本田存氏」『朝日新聞』1949年1月22日付朝刊（2）

95）工藤（1941: 9）の「本田存先生略伝」の職歴では，朝鮮語関係の職を含む職名の後に，現職として，「講道館評議員、庶務課長、東京高師講師（水泳）海軍兵学校嘱託教授（水泳）特許局嘱託」が挙げられている。

96）「体協で功労者表彰」『朝日新聞』1942年5月17日付朝刊（3）

97）前掲の訃報ではそれぞれ「柔道、水泳会の長老」・「日本水泳連盟顧問」と書かれていることは本田の社会的位置づけを表しているといえよう。

98）例えば村上（1984: 194）

毎週几帳面に授業を行い，試験も実施し，さらには試験後にも授業を行うなど，ことばを体系的にきちんと教えていた立派な朝鮮語教師であったと考えて差し支えないことは前述の通りである。それにも拘らず，朝鮮語や朝鮮に関する著述物は明治大学高等予科学友会の茶話会での講演録（本田1904）程度しか見いだせていない[99]。この点では，多くの著述物を残した柔道や水泳とは様相を異にする。

植田（2014, 2017a, 2017b）は，「言語が着脱可能であるという言語の着脱性」という概念を提示し，近代日本において異文化としての朝鮮語に接触した日本人と朝鮮語との関わりの一端について試論を行った。その結果，習得した朝鮮語は必要に応じて用いる「人生を切り拓く着脱可能なアイテム」であったということを明らかにし，近代日本人と朝鮮語との関係を個人の一生という視点から再検討し，朝鮮語教育史研究において従来の視点とは異なる枠組みを提示した。

ここで，本田と朝鮮語の関わりを考えるのに先立ち，本田からも朝鮮語を学んだと思われる奥山仙三・山本正誠といった，朝鮮語を着脱可能なアイテムとした旧朝鮮語学の人物と朝鮮語との関わりについて見る[100]。

奥山は1889（明治22）年生まれ[101]，東京外国語学校で朝鮮語を学び，朝鮮総督府に就職し，学務畑の官吏として勤めあげ，後には国民総力朝鮮聯盟の代表者にもなる。就職後，朝鮮語を生かして業務として教科書を編纂し，教員講習会などで，後に京城高等商業学校・京城医学専門学校で朝鮮語を教えた。敗戦後の経歴は不明である。『語法会話朝鮮語大成』（朝鮮教育会，1928年初版・日韓書房1929年初版）他2冊の学習書を残した。奥山にとって，恐らく苦労して身に着けた朝鮮語は業務におけるメシノタネ，すなわち「業務としての朝鮮語」というアイテムとなった。そしてそれを少なくとも敗戦，すなわち植民地朝鮮の終焉まで身に着け続けた。

山本は1891（明治24）年生まれ，東京外国語学校で朝鮮語を学び，朝鮮総督府雇員となる。後に私立東洋協会京城専門学校（後に高等商業学校に改称）や京城医学専門学校教授を務める。高等文官試験合格を機に，朝鮮語教師から公立実業学校長や朝鮮各地の商業学校長に転身する。さらに敗戦直後に引き揚げ，郷里の水戸市で学務部長・教育長などを歴任する。朝鮮在住中には『朝鮮語研究』（大阪屋号書店，1923年）他4冊の朝鮮語学習書を残した。山本は「人生を切り拓く着脱可能なアイテムとして朝鮮語を身に着け，それを利用して職を得るも，高級官僚への転身を機に朝鮮語（や朝鮮）から離れることによって，より豊かな物質的・精神的生活を求め，さらなる栄達への道を歩み，敗戦後にはいち早く郷里で朝鮮との関わりの片鱗すら見せず

99）東京外国語学校の『校友会雑誌』での卒業生の動静などを除く。本田（1904）では朝鮮の教育や社会について紹介するとともに，おおむね否定的な論調でその社会相に言及している。そのうえで，「韓国と我国とは、地理の上より見るも、歴史の上よりするも深い関係を有して居りますが、将来に於ては尚一層密接なる関係を有することになりませうから、我国民は、一人でも多く彼の国の事情を知つて居ることが必要である、特に諸君の如き青年にして、覇気満々たる方には、一層此点に向つてご注意を請ふ次第です、」と述べている。

100）それぞれ植田（2016b），植田（2017a）による。それ以外による記述は注記した。

101）朝鮮新聞社（1922: 196）

に教育界の名士として晩年を送った」人物である。

奥山や山本の例に典型的に表れているように，旧朝鮮語学の人物にとっての朝鮮語の特徴は（1）朝鮮を生活の場として，（2）朝鮮での生活への必要性により用いる，（3）立身出世や栄達の手段としての知識という条件を持つ。

一方，本田にとっての朝鮮語は旧朝鮮語学の人物とは異なる，すなわち反対の条件を持つものであった。本田が朝鮮語に関わり教えていたのは（1）生活への必要性のない日本本土（以下、便宜上「内地」）であり，（2）後に研究者となる錚々たる人々が学んだように，主に学問的な研究の材料として用いる，（3）立身出世や栄達とは無縁な知識であった。

すなわち，本田と朝鮮語との関わり方は当時の日本社会（内地）における朝鮮語の位置づけを反映していると考えられる[102)]。在朝日本人とは異なり，内地の社会では，生活での運用を目的とする朝鮮語，すなわち旧朝鮮語学の朝鮮語は必要とされず，学問的な研究の材料としての朝鮮語のみかろうじて存在意義が認められていた[103)]。そのため，朝鮮語の能力は評価の対象とはならず，東京外国語学校教授という立場にあった本田にとって立身出世や栄達に関わるものでもなかったと位置づけられる。内地で活動した本田にとって，朝鮮語は水泳・柔道と同様に嘉納との関係の中で習得した「技」のようなものであったと考えられる。

朝鮮語が内地の社会では評価の対象にならなかったということは，朝鮮でジャーナリズムや教育の分野で活動し，『文法註釈韓語研究法』（1909年）という学習書も編んだ薬師寺知曨（ともひで）が，別府に引き揚げて後，地獄めぐりの観光プロデューサーとして成功し，朝鮮語とはまったく無縁の後半生を送ったこと[104)]とも相通ずるものである。

内地の社会では顧みられない朝鮮語であっても，時代の変化と相俟って，朝鮮という社会においては，旧朝鮮語学の人物である奥山や山本のように，それが立身出世・栄達の元手になったと見ることができる。

私的には2度の大病（腸チフス・胃癌）を患い，関東大震災[105)]では九死に一生を得たものの，4人の子弟のうちの三男の戦死や空襲で2度焼け出されるといった戦禍も経験するなど「晩年は決して幸福とは言えなかった。」という[106)]。1949（昭和24）年1月4日，本田は北条の東京高等師範学校寮でその生を終え，1.で見たように，安房水泳クラブ・安房柔道有段者会・茗渓会と

102）3.で述べた柔道を通した本田と朝鮮語との関わりの希薄さも，内地における朝鮮語のあり方を反映しているといえよう。

103）それすら，4.で見たように，法科の友人が朝鮮語読本で朝鮮語を学ぶ服部を見てとった態度に表れているような，社会的には低い位置づけのものであった。

104）植田（2011）

105）花井（2002: 36–37）によれば，本田は倒壊した家屋の下敷きになったが負傷せず，一緒に師範室にいた松村素夫はこの時の負傷がもとで他界している。

106）本田（1943: 32–33），花井（2002: 36–37），村上（1984: 196），梅田（2002: 69），本田（1943: 32）。東京外国語学校辞職時の「辞表」に添付された「診断書」（国立公文書館デジタルアーカイブ「内務大臣秘書官加藤久米四郎他十八名官等陞叙並任免ノ件」請求記号：任B00856100）によれば，腸チフスには1913（大正2）年5月に，胃癌は晩年に罹患している。

いった水泳・柔道の関係者によって金台寺に分骨埋葬された。このような本田の人物史における水泳・柔道・朝鮮語との関わり方は当時の日本社会（内地）における朝鮮語の位置づけを照らし出しているといえよう[107]。

## 6. おわりに

最後に水泳・柔道・朝鮮語という3つの活動分野を統合して本田と朝鮮語との関わりについて考えたい[108]。

まず，3.で見た嘉納に対する本田の追悼文は彼の全体像をよく示している。柔道と水泳は嘉納治五郎という補助線によって同一線上に結び付けられる。上京して講道館に入門し，嘉納治五郎の直弟子として研鑽を積んだ本田は柔道の世界での活動によって嘉納の目にとまる。そして，柔道の指導者として，また講道館の職員として台頭する。そこに見えるのは，柔道の指導者，また，講道館職員・本田存の姿である。しかし，3.で見た嘉納の「講道館の用務も大切だがそれには代り得る者もあるから顧慮せずともよろしい」ということばを勘案すれば，講道館の職員としての業務はいわば，生計の糧の名目上のものであったとさえいえるかもしれない。

幼少のころ水に親しみ，上京後は水府流太田派に入門し，第4代師師範にまで上り詰めた本田は，水泳を重視する嘉納の目論見を体現する有能な弟子・部下であった。嘉納が高等師範学校長であったことも本田の水泳での活動を後押しした。そこに見えるのは，高等師範学校などの水泳師範，また，水府流太田派師範・本田存の姿である。3.で見た「本田を水泳界に活躍せしむるのは、自分が水泳の必要を認め斯界に何か貢献せんとする意にほかならない」ということばに見られるように嘉納の後ろ盾により，思いのままに水泳の普及・指導に邁進することができたのである。

本田の東京外国語学校入学は26歳の時である。このような年齢を考えたとき，何らかの目的意識があったと思われる。嘉納は，清国官費留学生の教育方を委託されたり，中国人留学生を対象とする弘文学院（宏文学院）を開設するなど，中国に目を向けていたことがわかる。その延長線上には朝鮮もあったと仮定すれば，嘉納という補助線によって朝鮮語もまたつながることになるといえるのではないか。直接的な根拠となる資料は見出せていないが，その一端として，前述のように1918（大正7）年に講道館は朝鮮支部を設けていることが指摘できる。水泳，柔道，さらには嘉納の思想の普及先として中国や朝鮮を考えた時，その人材の養成という課題が浮かび上がる。東京高等師範学校校長という職にもついていた嘉納には，高等商業学校附属

107）八木沼（2005: 目次の前頁）によれば，本田の戒名は清柔院存譽親水居士であり，3つの分野のうち柔道と水泳にちなんだものである。

108）浦辺（1952: 30）は「先生は体育家というには、余りに素人くさく、教育家というには、余りに通俗的であり、武道家というには、余りにも進歩的であった。此の何れでもなかつたが又之等の夫々の専門家にも敗けないだけの知識と、教育力と風格を備えておられた処に先生の面目があつたと思う。」と評している。静岡県保健体育課長という肩書からも，浦辺は柔道か水泳で本田の指導を受けたなどのスポーツ関係の人物と思われる。

外国語学校に韓語学科が開かれるという情報も耳に入ったであろう。本田が嘉納に水泳で抜擢されたように，その白羽の矢が柔道の直弟子であり水泳に通じた本田に当ったと考えることもできよう。矢野（2012: 303）は，旧朝鮮語学について「水泳の習得はまず泳法について簡単に基本的な体の動きを教え、次に水に入らせ、泳がせながら泳法を身につけさせる。朝鮮語の話し言葉の習得をこれと似た過程で行っている。文法的な説明をほとんどないものの、話し言葉の習得の方法としては充分なものであった。」と指摘している。水泳・柔道の達人である本田はその「技」を師から身に着けたように，嘉納の意図の延長線上でさらに朝鮮語という「技」も身に着け、教えたと考えられる。その結果，浮かび上がるのが東京外国語学校教授・本田存の姿である。

さらにいえば，水府流太田派師範，講道館柔道指導者・元老である職員，東京外国語学校教授という相異なる属性が併存するように見える本田存は，嘉納治五郎という人物を通して見れば，嘉納の直弟子として嘉納の意図の広がりの中で3つの分野に渡って活動した人物であるという一つの像として位置付けることができる[109)]。

嘉納にとっての本田は自己の思いを実現してくれる人物であり，本田の人生にその影響が大きく及んでいたと考えられる。このような視点に立てば，朝鮮語も水泳・柔道と同一線上にあると見なすことができる。しかし，内地において水泳・柔道には大きな需要があり，社会的にも評価されたのとは異なり，朝鮮語には社会的な需要がなく，その能力も社会的には評価されなかったのである。

本田は朝鮮語学習書や朝鮮語に関する著述物を多く残したわけではない。しかし，本田は内地で朝鮮語をきちんと教える朝鮮語教師として立身出世・栄達とは無縁な朝鮮語に深く関わった人物であり，旧朝鮮語学の人物とは異なったタイプの人物であったと位置づけられる。

このような点からは，学問的な研究者ではなく，朝鮮語学習書も残さなかった朝鮮語教師の持つ意味も論ずることができるであろう[110)]。また，嘉納治五郎と本田，あるいは朝鮮との関係のより詳細な検討も今後の課題である[111)]。

109）浦辺（1952: 28）はまた，「一見古武士的な風格を備えて一寸近づき難く、一徹で保守的な武道家の典型のように見えた先生が、童顔一度ほころぶと文字通りの好々爺となり、極めて進歩的で大衆的な性格をまる出しにされて若い者達に親しみを覚えさせられた事や、柔道や泳ぎに対する考え方が極めて進歩的であり、社会あらゆる方向に知己があり、極めて常識に富んだ社交家であった事など、こういう先生の経歴に負うているものと思われる。」と述べている。「こういう先生の経歴」とは，朝鮮語を学び母校に職を得，日露戦争開戦により留学を中断して帰国して教授となったことを指す。

110）本田の同僚であった金沢庄三郎は，学問的な研究者で，朝鮮語学習書を残さなかった人物と位置付けることができよう。

111）柳宗悦が叔父である嘉納の「薫陶を受けて育ったと考えられる」こと（韓永大2008: 219）も視野に入れる必要があるかもしれない。また，査読者のお一方から，中国語を学び藩公の援助で清に留学し，さらに朝鮮に赴き，日清戦争で通訳官を務めたのち，台湾で官吏となった大屋半一郎の父が館林藩士であったことから，館林藩の人脈から本田と朝鮮の関わりについて見ることができないかというコメントをいただいた。これについては，管見の限りでは関連する痕跡は見いだせなかった。この点についても，今後の課題としたい。

## 引用文献[112)]

愛沢伸雄・池田恵美子 執筆（2007;2008[2刷]）『海とともに生きるまち（あわガイド3）』NPO法人安房文化遺産フォーラム

石川遼子（1992）「東京外国語学校朝鮮語学科の廃止をめぐる二、三のこと」『青鶴』（5），在日韓国・朝鮮人問題学習センター

石川遼子（1997）「「地と民と語」の相剋」『朝鮮史研究会論文集』35，朝鮮史研究会

石川遼子（2014）『金沢庄三郎』ミネルヴァ書房

伊藤英人（2000）「明治十四年版外務省蔵版「交隣須知」浦瀬裕校正増補」（東京外国語大学ウェブサイト　https://www.tufs.ac.jp/library/top/about/exhibition/200006-2/，2023年11月9日最終接続）

岩橋小弥太（1963）「遠い明治の思い出」『国学院大学学報』66，国学院大学編集課［『国学院大学学報』縮刷版1，国学院大学，1996年］

植田晃次他（2006）『朝鮮語教育史人物情報資料集』科学研究費補助金（17320085）報告書（1）

植田晃次他（2007）『日本近現代朝鮮語教育史』科学研究費補助金（17320085）研究成果報告書

植田晃次（2009）「日本近現代朝鮮語教育史と相場清」『言語文化研究』35，大阪大学

植田晃次（2011）「薬師寺知曨」『言語文化研究』37，大阪大学

植田晃次（2012）「明治期朝鮮語学習書・伊藤伊吉『独学韓語大成 全』の書誌学的研究」**李东哲・权宇 主编『日本语言文化研究』第二辑（下），延边大学出版社**

植田晃次（2014）「近代日本人と異文化としての朝鮮語との接触」（第65回朝鮮学会大会での研究発表配布論文）［要旨は『朝鮮学報』234に掲載］

植田晃次（2015）「本田存と朝鮮語」（第66回朝鮮学会大会での研究発表配布論文）［要旨は『朝鮮学報』238に掲載］

植田晃次（2016a）「水府流太田派師範・講道館庶務課長・東京外国語学校教授　本田存」（第102回21世紀スポーツ文化研究所神戸例会での研究発表配布論文）

植田晃次（2016b）「奥山仙三と朝鮮語」**李东哲・权宇・安勇花 主编『日本语言文化研究』第四辑（上），延边大学出版社**

植田晃次（2017a）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た山本正誠と朝鮮語」『言語文化研究』43，大阪大学

植田晃次（2017b）「近代日本人と着脱可能なアイテムとしての朝鮮語」（第68回朝鮮学会大会での研究発表配布論文）［要旨は『朝鮮学報』246に掲載］

112）デジタル化資料にはDを付したが，新聞・官報には付していない。また，リポジトリなどで公開された論文等はその旨を示していない。朝鮮名の配列は日本漢字音によった。

植田晃次（2023）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た島井浩と朝鮮語」『言語文化研究』49，大阪大学

上村春樹（2012）『講道館柔道百三十年沿革史』講道館

梅田利兵衛（2002）「本田存先生のこと」茗水百年史編纂委員会（2002）

浦辺秀夫（1952）「学校体育に寄与した人々―本田　存―」『学校体育』5（7），体育日本社

興津達朗（2002）「水泳と私（昭和一一、一二年）」茗水百年史編纂委員会（2002）

尾城和利（2004）「本田存先生と私」尾城和利『実践で綴る戦後教育60年』尾城和利

折口信夫（1930; 1930[2]）「追ひ書き」折口信夫『古代研究 第一部 民俗学篇 第二』大岡山書店D

柿木重宜（2013）『近代「国語」の成立における藤岡勝二の果たした役割について』ナカニシヤ出版

片桐三郎（1937）『炬友会々報』5，東京外語柔道部炬友会

韓永大（2008）『柳宗悦と朝鮮』明石書店

工藤一三（1941）「妙技解説（八）」『柔道』12（1），講道館D

慶谷壽信（2009）「有坂秀世伝試稿」慶谷壽信『有坂秀世研究―人と学問―』古代文字資料館［初出は東京都立大学『人文学報』213，1990年］

国学院大学校史資料課 編（1994）『国学院大学百年史（上巻）』学校法人国学院大学

子安正男（1949）「本田先生を悼む」『柔道』20（4）講道館

真田久（2002）「東京高等師範・東京文理科大学期の茗水の概観」茗水百年史編纂委員会（2002）

真田久・中島沙織（2002）「「游泳部」設立とその背景―明治三五年―」茗水百年史編纂委員会（2002）

真田久・椿本昇三・高木英樹（2007）「嘉納治五郎主導による水術の再編に関する研究」『体育学研究』52（3/6），日本体育学会

高橋雄治（1919）『増補改訂大日本遊泳術』水交会D

朝鮮新聞社（1922）『朝鮮人事興信録』朝鮮新聞社［『日本人物情報大系73　朝鮮編　3』皓星社，2001年］

東京外国語学校（1916？）『東京外国語学校職員写真帖』東京外国語学校［東京外国語大学蔵，書誌ID: GT00038393。著者名・刊行年・発行所は東京外国語大学OPACによる。］

東京外国語大学史編纂委員会（1999）『東京外国語大学史』東京外国語大学

東京帝国大学（1942）『東京帝国大学学術大観　総説　文学部』東京帝国大学D

永岡秀一（1949）「本田君の死を悼む」『柔道』20（4）講道館

西村真太郎（1909）「母校の近状（一）」『会報』（4），東京外国語学校韓国々友会

日本水泳連盟日本泳法委員会（2001）『日本泳法12流派総覧』日本水泳連盟

野中正孝（2008）『東京外国語学校史』不二出版

長谷川武（1990）『大日本游泳術』非売品

長谷川武（2005）「水泳部発祥の由来」八木沼（2005）
畠山一男（1995）『茗溪体育八十年』菜摘舎
服部四郎（1935）「朝鮮語動詞の使役形と受身・可能形」藤岡博士功績記念会 編『藤岡博士功績記念言語学論文集』岩波書店
服部四郎（1964）「有坂秀世君の遺著「語勢沿革研究」を読みて」有坂秀世『語勢沿革研究』三省堂
服部四郎（1968）「一言語学者の見た隣国」『文学』36，岩波書店
服部四郎（1984a）「祝賀会でのお話」服部四郎 編『言語学ことはじめ』服部四郎
服部四郎（1984b）「藤岡勝二先生に関する補説」服部四郎 編『言語学ことはじめ』服部四郎
服部四郎（1988）「朝鮮語と私」大阪外国語大学朝鮮語研究室『朝鮮語大辞典』上巻，角川書店
花井重次（2002）「芳燭舎倒壊―大正一二年」茗水百年史編纂委員会（2002）
東憲一・飯島啓子（2015）「嘉納治五郎の外国語学習」『講道館柔道科学研究会紀要』15，講道館
東憲一・飯島啓子（2016）「東京外国語学校と講道館に於ける本田存について」『武道学研究』49
東憲一（2017）「嘉納治五郎と本田存について」『講道館柔道科学研究会紀要』16，講道館
本田存（1904）「朝鮮談（雑俎）」『明治法学』72，明治法学会D
本田存（1919）「競泳に就いて」『有効乃活動』5（8），柔道会本部D
本田存（1934）「昔時の指導振りと修行者の意気」『柔道』5（5），講道館文化会
本田存（1938）「危難に遭つて安全に身を脱する新しい婦人の護身術」『主婦之友』昭和13年8月1日［岩見照代 監修（2015）『「婦人雑誌」がつくる大正・昭和の女性像』9，ゆまに書房］
本田存（1939）「嘉納先生を偲ぶ座談会」（座談会出席）『柔道』10（5），講道館D
本田存（1943）「入院中体験した病を克服し死線を突破する方法」『柔道』14（6），講道館D
本田存（1949）「温故知新談」『柔道』20（2），講道館D
本田存（1988）「嘉納先生を追想して」講道館 監修『嘉納治五郎大系』14，講道館書誌編纂会（発売）［1988年は「大系」の刊行年］
丸山三造（1950）『柔道世界をゆく』日本柔道研究会
村上四男（1984）「（三）本田存先生」『韓史余滴（無窮花庵襍記（一））』非売品
茗水百年史編纂委員会（2002）『茗水百年史』茗水会
八木沼正彦（2005）『富浦水泳場開設100周年誌』桐游倶楽部
矢野謙一（2009）「宝迫繁勝の朝鮮語と明治維新」**『延边大学学报（社会科学版）』42増刊，延边大学学报编辑部**［植田晃次 編著（2011）『学習書を通してみる近代日本における朝鮮語教育史』科学研究費補助金（20320081）研究究成果報告書（1）に再録］
矢野謙一（2012）「日本における旧朝鮮語学」**李东哲・权宇 主编『日本语言文化研究』第二辑**

（下），延辺大学出版社
矢野謙一（2014）「20世紀初めの日本人による朝鮮語文法」李东哲・安勇花 主编『日本语言文化研究』第三辑（上），延边大学出版社
山岸研（1977）「一　創設期・明治（三二～四五年）」『東京外語柔道部史』東京外語柔道部史出版委員会
山岸研（1979）「明治の追録」『東京外語柔道部史（続）』東京外語柔道部史出版委員会
山田寛人（2004）『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策』不二出版
米重一正（2002）「本田存先生との出会い」茗水百年史編纂委員会（2002）
和田軍一・岩生成一（1981）「大震災前後よもやま話」日本歴史学会 編『日本歴史』（400），吉川弘文館D
――（1898）「横浜に於ける内外人の競泳」『国士』1（1），造士会［『国士』1-12，本の友社，1984年発行複製版］
――（1899a）「有段者」『国士』1（4），造士会［同上複製版］
――（1899b）「内外人競泳」『国士』1（12），造士会［同上複製版］
――（1909a）「記事　明治四十二年度第三期（自九月至十二月）」『会報』（5），東京外国語学校韓国校友会
――（1909b）「会員名簿」『会報』（6），東京外国語学校韓国校友会
――（1916）「講道館五段肖像」『柔道』2（2）柔道会本部事務所［『柔道』2，本の友社，1984年発行影印本］
――（1919）「講道館朝鮮支部開設式」『有効乃活動』5（2），柔道会本部D

付記：本論文は第66回朝鮮学会大会（2015年 10月4日）での研究発表「本田存と朝鮮語―日本近代朝鮮語教育史の視点から―」，第102回21世紀スポーツ文化研究所神戸例会（2016年3月27日）での研究発表「水府流太田派師範・講道館庶務課長・東京外国語学校教授　本田存」の内容（植田2015, 2016a）に基づき，大幅に加筆・修正したものである。

本論文はJSPS科研費 23K00745による成果の一部である。なお，それ以前の科研費（17320085・20320081・23520671・26370726・18K00782）で得た知見も含んでいる。

資料閲覧では関係諸機関のご配慮をいただいた。また，一連の科研費による研究の共同研究者・矢野謙一教授（熊本学園大学）から多くの助言を，査読者お二方から有益なコメントを賜った。上記の発表前後には複数の方々からも貴重なコメントや資料に関する情報を賜ったが，幽明界を異にされた梅田博之教授のみお名前をお挙げするとともに，すべての方々の学恩に等しく感謝申し上げる。なお，本論文ではこれらのご教示を反映させた部分がある。

現在では不適切とされる語句も歴史的経緯から当時の表現を用いた場合がある。

追記：脱稿後，本田存 述「韓語会話」『清語講義録』（東亜学会）を見出した。東京外国語大学蔵書（No.0000450385）は「製本」もしくは「合本」（奥付なし），『中国語教本類集成』第8集第2巻（不二出版）所収の影印は第1巻第1号の「バラ」（1908年8月25日発行）である。東洋文庫蔵書は未見である。なお，「講義録」の形態・用法については拙稿（2009）「「講義録」という形態から見た『朝鮮文朝鮮語講義録』の異本とその生成過程」『延辺大学学報（社会科学版）』第42巻増刊（延辺大学学報編輯部）［矢野（2009）と同じく科研報告書に再録］を参照されたい。